

# 子ども国際理解サマースクール

事業代表者：宇都宮大学国際学部 教授 田巻松雄

## 1. 事業の目的・意義

今年度は本学にて、ゲームや遊びの中で、相互理解や国際協力に関心を持ち、日本に暮らす外国人たちと接し、世界に目を向けるきっかけとすることを目的に「子ども国際理解サマースクール」を開催しました。宇都宮市内の小学校4年生～6年生の約45名と大田原市にあるソシエダ・ドッカシオ・ブラジリアン・スクール（以下、SEBS）の児童生徒17名との交流を企画、宇都宮大学の学生が主体となって運営しました。グローバル化社会における国際理解には、さまざまな背景を持つ子どもたちが、共に生活し、学習し、そのための新しい関係をどのようにつくるのが大切です。このような観点から、相手の国・文化・習慣を知り認め、お互いに協力することの大切さを体験するために、子どもが主体的に学習する場を提供することは、国際理解教育の面で意義があると考えられます。また、本学で実施したことにより、第1日目午前の部会場の第2体育館から午後の部会場のUUプラザまで、学内を移動しながら、途中、ラーニング・コモンズで学ぶ学生の姿を見たり、小学校にはない大教室へ入室したりと、大学で学ぶことへの興味の目を育むことができたのではないかと思います。

## 2. 事業の内容

(1) 第1日目：8月8日10時～14時

テーマ「ゲームいっぱい(^)アミーゴいっぱい♡」

1日目は、大田原市SEBSに通う児童生徒との交流がメインとなるプログラム構成でした。この交流は毎年行っていて、今回で4度目です。SEBSから今年は、17名のSEBS児童生徒と、2名の教職員と、2名の保護者が参加しました。

本学第2体育館で、開校式の後、3つのゲームで交流しました。日系ブラジル人の新屋明夫さんが講師となり、県立今市特別支援学校講師の金子俊一さんがアシスタントを務めました。

ゲームの前に、まずは、語学講座。Bom dia. (おはよう。)/ Oi, tudo bem? (やあ、元気?) Meu nome é \_\_\_\_\_. (私の名前は\_\_\_\_\_。) / Obrigado. (ありがとう。)/ Boa! (いいね!) など、日本人児童はポルトガル語で、SEBS児童生徒は日本語で学びました。Boa!は、会話においてとても有効的な単語だそうです。

### ①「手つなぎ鬼ごっこ」

一人の鬼から始めます。鬼にタッチされないように、体育館内を自由に動き回ります。鬼にタッチされてしまった人は鬼と手をつなぎ、どんどん鬼が増えていく仕組みです。鬼にタッチされないで最後まで残った人が勝ちです。残念ながら鬼になった人は、他の鬼と協力して逃げている人を追いかけます。「あっちだり」「いくぞ～」など、子どもたちはすぐに仲良くなり、体育館には、子どもたちのはしゃぎ声と駆け巡る足音が響いていました。鬼役の大学生も汗だくで追いかけてました。

### ②「協力ゲーム」

全員の子どもたちを6人ずつ10のグループに分けました。床に広げた一枚の新聞紙の上は何人のれるかをグループごとに競いました。たった1枚の新聞紙には、せいぜい2～3人しかのれませんが、全員がのらなければなりませんから、自然に全員が知恵を出し合い、話し合い、協力し合います。6人全員がのることを目標に、子どもたちは、コミュニケーションをとることの大切さを体感しました。最終的に、体の大きい子が小さい子を抱っこしたり肩車したりして、どのグループも全員が一枚の新聞紙の上に収まりました。



### ③「フリースロー大会」

バスケットボールやバレーボールを使ってバスケットボールリングにボールを投げ入れるゲームです。大学生用のリングですから、児童生徒には少し高さが高かったようで、小さい子がゴールを決めやすいよう抱っこしてあげている高学年の子どもたちもいて、なんとも頬笑ましかったです。シュート成功のご褒美に、本学ロゴマーク入りの蛍光ペンを差し上げました。

ゲームの後は、体育館から学生食堂に移動して、Table For Twoの昼食メニューをみんなで一緒にいただきました。「いただきます」の前に、学生からパワーポイントを使って、以下のような説明がありました。

大学には、Table For Two といった活動があります。Table For Two、直訳すると「二人の食卓」。今回私たちがいただいたメニューの代金のうち、約20円が開発途上国の子どもたちの食事に充てられます。先進国の私たちと開発途上国の子どもたちが、時間と空間を越え食事を分かち合うというコンセプトです。世界の約70億人の人口のうち、10億人が飢えに喘ぐ一方で、10億人が肥満など食に起因する生活習慣病に苦しんでいます。この深刻な食の不均衡を解消するため、日本ではじまったTable For Twoは海を越え、海外でも広がっています。

説明を聞いた児童生徒達は、食事をしながら、地球人としても



学ぶことができたことでしょう。また、ブラジル飲料「ガラナ」やブラジルのピーナツ菓子もいただきました。宇都宮市内の児童たちは、初めての味に興奮していました。

元気のいい「ごちそうさまでした」のあとは、午後の活動場所であるUUプラザに向けて、学生食堂から移動です。途中、国際学部の1121教室やラーニング・コモンズを経由しました。100人以上が聴講できる大きな教室に入ると、「うわ〜、広い」「階段状になってる！」と初めて見る大学の教室の様子に驚いていました。何台ものパソコンが設置されたラーニング・コモンズという学生の共有のスペースでは、グループ学習をしている学生の様子を直接目にし、「すごいな〜」という声に参加児童生徒から聞こえました。今回の参加児童生徒の中から、大学進学を目指して勉強してくれる子どもがいるといいなあ、本学に入学して再会できたらいいなあ、と思いました。

午後は、「飛び出す絵カード作り」をしました。学生が事前に準備した色画用紙、日本とブラジルの国旗シール、Obrigadoと印字されたシールなど、数々のパーツを使って、カードを作りました。各テーブルでは、「これ、貸して」、「使っていいよ」、「上手だね」などと、楽しく制作に励み、夏の記念になりました。

最後に、SEBS児童生徒から、ちょうちょの形をした袋に入ったお菓子を日本人児童一人一人にプレゼントしていただきました。ちょうちょの形をした袋は、SEBS児童生徒の手作りだそうで、とてもかわいいちょうちょで、開封するのがもったいないくらいでした。

そして、本学フランス式庭園で写真撮影をしたあと、いよいよお別れです。SEBS児童生徒が帰る際、何人もの日本人児童がバスまで見送り、「Chau chau!」「Obrigado!」といったまでも手を振り、別れを惜しまました。

(2) 第2日目：8月9日10時〜12時  
テーマ「世界を知ろう&世界から学ぼう2013  
〜ブータン王国編〜」

昨年度から、世界の国や地域から1つを選び、その国や地域について学習することにより、国際理解教育の一助となるよう構成されたシリーズです。今年は、萩原好子(海外青年協力隊OG、本学大学院国際学研究科前期1年)さんを講師に、宇都宮市内の児童たちがブータン王国について学習しました。



普段、なじみのないブータン王国。まずは、世界地図からその場所を確認し、国旗の意味(黄色は国王の権威、オレンジは宗教、

雷龍の白は多言語・多民族国民の国家への忠誠心)を萩原さんから教えていただきました。

それから、児童を5つに班分け、各班ごとに(1)食文化(2)教育(3)服飾、宗教(4)通信、通貨(5)王政、国旗の5つから1テーマを学びました。各班のテーブルに置かれた資料・写真資料などから、「日本と似ているところはどこか」「違うところはどこか」考え、各班で話し合いました。竹で編んであるブータンのお弁当箱を開ける

のに、慣れない私たちは、非常に時間がかかりました。

主食は米、おかずは唐辛子、食べる前にご飯粒や汁を少しだけ外に飛ばす習慣、国語はゾンカ語、歴史以外の授業は英語で教育、友人同士で軽い感じで交わす「こんにちは」はゾンカ語でなんと「クズ」、伝統衣装名は「ゴ」「キラ」、ブータン人は仏教徒、手のひらを相手に見せるのがブータン流のお辞儀、ブータンの通貨はニュルタム、500ml ジュース1本25ニュルタム(約40円)、2008年から立憲君主制になったことなど、萩原さんから多くのことを学びました。

その後、希望した児童2名がブータンの民族衣装を試着させていただき、みんなで記念撮影しました。カラフルでとても素敵な衣装でした。

「今日話したことは、農業支援のためブータンに渡り、生活した経験から、私の目で見えてきたブータンについてでした。大きくなったら、今日私から聞いたことを、是非ブータンに行ってみて確かめてみてください。」と萩原さん。本当に一度ブータンに行ってみたくなりました。世界を身近に感じる機会を与えていただきました。



### 3. 事業の成果

#### ・参加した子どもたち

日本語の理解が不十分なブラジリアンスクールの子どもたちと、ポルトガル語のわからない宇都宮市内の子どもたち。相手の言葉がわからないもの同士のはずなのに、あつという間に一緒に活動できます。その能力には、驚かせられます。インターネットで簡単に調べられる時代ですが、直接ふれあって、協力し合って、交流することで、忘れられない経験を体感することができたことでしょう。ブラジルやブータン王国について、知らなかったことを知るときの、子どもたちの目の輝きから、本事業の成果の大きさを知ることができました。

また、萩原好子さんが持参したブータンの生活用品や民族衣装を実際に手にし、ブータンの暮らしについて学びながら、異文化を知ることの重要性を知り、心の成長を感じ取ることができました。

#### ・運営協力した本学の学生たち

国際理解教育の意義と課題、小学生が関心を持って学べる国際理解教育とは何か等について、運営に協力することを通して理解を深めることが出来ました。